

## 祈りのなかに 13人のグランマザー初来日

龍村ゆかり

2010年4月20日、メキシコ湾沖で、原油の流出事故が起きました。この事故は、海底から原油を汲み上げる深海油田掘削施設が爆発炎上したことによって、海底の地中深くの化石燃料が海に流れ出したもので、事故から2カ月を過ぎた今なお、止める術もなく、原油が海を汚染し続けているのです。この事故の報道は日本では断片的なものに過ぎませんが、全米では連日のように報道されています。

爆発によって少なくとも海底に18箇所もの裂け目ができ、いちばん大きな裂け目は事故が起きた場所から11km離れ、一日の流出量は三百万から六八〇万リットルに達する可能性があるそうです。

油膜が海面を覆い、海の生き物たちが次々と死に絶えています。油を分解する分散剤も多量に散布されたようですが、これも毒性があるものらしく、海の生物のみならず、人間へも悪影響を及ぼすことが懸念されています。

この事故を憂い、生きとし生ける全ての命のために、この事故の一日も早い解決を祈ってほしいというメールが、13人のグランマザーたちからのメッセージとして日本に届きました。祈りによる光の網をメキシコ湾にかけてほしいという内容でした。

私たちの母なる地球は痛み、苦しんでいます。光の網が水を、土を、植物、海の生き物たち、そして人々を抱いてくれているのをイメージすることは、壊れたバランスを取り戻し、よりひどい危機的状況に陥るのを避けることができるということです。私は、友人たちと集ったときにこのこ



言の場をつくらなくてはならないと思いつたのです。

13人のグランマザーの中に、アマゾンの森に住みながら、自生する薬草を使って病気を治すヒーラー、クララ・シノブ・イウラさんが選ばれました。クララさんの御両親は日本人で、ブラジルに移住されてから生まれた日系ブラジル人二世です。子供のころから日本語を聞き、日本の習慣のなかで育ちましたが、ブラジルと日本の狭間で、苦しみも多く、常に自分自身の心のありかを探し続けられていました。そんなある時、神秘体験に導かれて都市を離れ、アマゾンの森の奥に住み、植物の声を聞くようになったのです。森での暮らしは20年に及んでいます。

クララさんは、13人のグランマザーへの招待を受けてから、いわゆる先住民でもない自分がなぜこの輪のなかを選ばれたのか問い続けていたのですが、チベットの人が亡命生活を送るインドのダラム・サラでダライ・ラマ法王に謁見されたとき、まざまざと自分が東洋人であることを自覚したのです。そのとき、自分が主賓となるグランマザー会議は日本で開催したいという想いが強く起きました。

私がクララさんに出会ったのは、そのダラム・サラで行われた会議の直後でした。初めての出会いでどんな会話を交わしたのか覚えていないほど、クララさんと出会った瞬間から私たちは昔からの親友のごとくビジョンを分かち合いました。そして普段は日本に住んでいないクララさんに代わって、日本の国際会議開催の準備を手伝わせていただくことになりました。日本での開催は今年の10月に決定、開催地は奄美大島となりました。アマゾンの森で暮らすクララさんは奄美大島の森の植生に似たものを感じたようです。

クララさんだけではなく、グランマザーたちにとって、とりわけホピ族の人々には日本へは格別な想いがあります。それは、ホピの聖地である大地から、広島・長崎に落とされた原爆の原料となったウランが採掘されたからです。ホピとは平和という意味で、争いを好まず、本来の人間のあるべき生き方を忠実に守っている部族であると同時に、人類史上初の被爆地であるともいわれています。平和に生きる民として、長崎の地を訪れ、未来の子供たちのために祈りを捧げることは、ホピ族のグランマザーの願いでもありました。その日がまもなくやってきます。

今、地球が様々な岐路に立たされているこの時期に、祈り人であるグランマザーたちを日本に迎えることは、この美しき青き星をこよなく愛する私にとっても何よりの喜びでもあるのです。

(映画地球交響曲プロデューサー)

とを皆に伝え、共に祈りました。このメッセージは、後に、実は13人のグランマザーからのものではなく、もうひとつの12人のグランマザーから(それも天界の!)だったということが明らかになるのですが、13人のグランマザーたちもまさに同じビジョンを見ていたに違いない、と思わせる呼びかけだったので。

13人のグランマザーたちは、アフリカ、ネパール、チベット、アマゾン、ホピ族、マヤ族、ラコタ族、イヌイト族など、言語も肌の色もちがう女性長老たち13人によって結成されました。

アメリカ先住民の間で知られているホピの古代の予言があります。それは「4つの肌の色、4つの人種が集まりつながつたとき、すべての生命がひとつの聖なる環のなかに存在する新しい地球が始まる」というものでした。

この予言の言葉に呼ばれたかのように、世界のグランマザー13人が2004年ニューヨーク郊外に集い、輪になり、皆で誓いをたてました。それは、母なる大地の苦しみ、悲しみの声に耳を傾け、癒しの祈りを行い、これから続く7世代あとのこどもたちへ古代から伝わる叡智をつなぐための誓いでした。以来、グランマザーたちは年に1回か2回、互いの地を訪れ、13人のグランマザー国際会議を開いてゆくことになったのです。

すべての生命はつながっているのだから、癒しや生活の質、霊的進化を政治や思想と切り離すことはできないとグランマザーたちは信じています。だからこそ、今、この危機的状況に直面している生きとし生ける全ての生命のために、13人のグランマザーは祈り、儀式、祭式を分かち合い、地球全体を癒してひとつの声を世に送り出す同盟を築いたのです。

このたぐいまれなるおばあちゃんたちの会議は、ある一人のアメリカ人女性によって引き合わされました。この女性が先住民の伝統が人々に生来備わっている知恵と力を発揮する手助けに貢献できることに興味を持ち、様々な先住民の生活様式を研究していたある日、長老たちの発

### 風信

○七月三十日参議員本会議で新議長に本県の西岡武夫先生が選出された報に接し先づ御祝詞を申し上げます。

○そして、八月に入りました。皆様にも暑中御見舞を申し上げます。

○さて長崎の八月と言えば、原爆忌の悲しい思い出に始まり平和公園・平和祈念像の創建と其の思い出は続き、十五日夜には初盆の家より家人に見送られた精霊船が静かに県庁の坂を上って行く。然し、昨今の精霊船は車を

つけ、大きな爆竹をあげ「お盆まつり」になってしまったようで寂しい。

○八月三日午後二時、日本ポルトガル修好二五〇周年と、十八銀行宮脇頭取が在長崎ポルトガル名誉領事就任の事もあつて、ポルトガル帆船サグレス号入港。種々の行事があつた。私には、其のサグレス号について深い思い出がある。

最初サグレス号が入港した三十数年前、其の船の出港前日・二十六聖人記念館長のパチエコ神父様より連絡あり「明朝サグレス号出港の時、二六〇年(慶長一五)二月九日長崎港外で亡くなられたマードレ・デ・デウス号の追悼式を船上でするので其の位置確認のため一緒に来て下さい」との事。私は早速、船に乗せて戴いた。追悼のミサは神島の沖、伊王島前面の海上であり投花、弔砲の事もあつた。神父様と私は伊王島の沖よりサグレス号の土官さん達に送られ迎えに来た小さな船に乗り帰ってきた。波は高く白波が立っていた。

○今月は次の御本を戴いた厚く御礼申し上げます。

一、『長崎関係史料選集 第二集』長崎史学習会編集発行。

長崎史学習会は平成五年九月発足・以来毎月一回集まり古文書を読み学習し、史料選集を発刊してきた。今回は出来大工町乙名若杉家所蔵の文書より「出島乙名歴代・同受用銀・同部屋雑用・同町雑之事」一冊と「勤方書若杉」を収録、その史料の紹介が付してある。今回の文書には多くの新しい資料が記載してあり、今後の長崎史研究資料として重要なものが多く収録されていた。(発行所電話(〇九五)八一八―八四〇二)

一、『弥太郎の長崎日記』赤瀬浩氏著。表紙に「龍馬伝もうひとりの主役」と記してある。弥太郎は三菱造船所の創立者岩崎弥太郎であり、長崎には龍馬より一足はやく安政六年(一八五六)十二月六日に来ている。龍馬を裏面より解説させる楽しい本であった。(長崎文献社刊 八〇〇円税別)

一、『平戸に伝わる昔ばなし』前号「深川編」に続く第二編で「子供さんにもわかる絵と童話」で綴られている(平戸市教育委員会推薦 永田米吉著・亀渕佐喜子画。平戸昔話研究会刊 一二五〇円)

長崎歴史文化協会 研究室

TEL 八二二一―一五四〇  
十八銀行公会堂前出張所 2F

